

此卷を夢浮橋と題する事、詞にも見えず、歌にもなし、古來の不審也、凡夢のうきはしとつゞけたる事、是よりは生まれり、夢のわたりのうきはしとあり、歌につきていへる歟、○中 浮橋は生死のおこり、煩惱の根元也、夢とは世間出世の法、皆如幻如夢なりと云心歟、

〔源氏物語湖月抄五十四〕終卷を夢浮橋と號す、此卷の別名のみにあらず、一部の總名なるべし、

○中 案之、眞實之義は夢の一字の外は別の心なし、浮橋は夢にひかれて出來たる詞也、略 ○中 さ

れば本歌の世の中は夢のわたりのうきはしはしかうちわたしつ、物をこそおもへ、といへるも、うき橋に別の儀なし、定家卿の、春の夜の夢のうき橋とだえしての歌もおなじ心也、

〔書言字考節用集二〕乾御廟橋本朝俗斥靈廟前面所架橋

〔國花萬葉記二〕下御廟橋山城 泉涌寺入口の橋也、古へよりの御陵墓この山にまします故かく名付、

○又見京羽二重

〔幸充日次記〕寛延三年四月廿三日、仙洞御所崩御、御寶算三十一、奉稱櫻町院、○中

一御車山田氏 今度入札而他人作之、雖然山田モ立加云々、其後塗萬仕立者寺町妙滿寺寺中而仕

例也云々、五月十五日丙辰、五條橋試之車、重目相量牛而被令牽之云々、橋板者横板一寸而一面

打付、敷古疊令蒔砂、